

つぶやき

このコーナーでは各県の相談に対するとりくみ等を紹介していきます。

「あげる」の呪縛

新潟県教職員組合（日教組中央執行委員） 山本 和代

「～してあげる」「～な力をつけさせたい」「～にとりくませる」という言葉をよく見ている気がします。子どもや自分より経験が少ない人に対しこんな目線はよくあることかもしれません。特に「人を教える」という立場にある人はこの気持ちガンガンある気がします。学習指導案なるものはこういう言葉満載。かくいう私も（申し遅れました。私小学校教員です。）「子どもにはこんな力をつけさせなければならない。」とか「できるようにする先生であらねばならない」とかいう思い満載で、そのために何をして「あげよう」と日々思いあぐねていました。

今年は子どもの権利条約を日本が批准して20年目です。私たち日教組もその具現化にとりくんでいます。中央執行委員という任をいただき、いろいろ考える視点をいただいたと思っています。川西市子どもの人権オンブズパーソンとして、子どもの声を聴き関係者をつなぎ問題の解決を図ってこられた桜井智恵子さん（大阪大谷大学）は著書「子どもの声を社会へ」の中で「子どもの話を聞かせてもらう」とおっしゃっています。「聞い

てあげる」ではなく。そして「子どもと一緒に考えさせてもらう」と書いておられます。私は「子どもは管理するもの」「補ってあげるべきもの」との認識をもっていたのです。子どもの力は育てるものじゃなく育つもののはずですね。「あげる」は上から目線な傲慢な思いこみかもしれません。ダメダメだ！とかなり落ち込みます。

そんな話を友人にしたら「期待する姿を思い描き、本気でそんなふう育てたいと思うことができるってことも、すごいよ。」と言われました。その人はいつも「子どもと一緒に学んでいく」構えの教員でした。ガンガンでダメダメな私はその一言でとても救われたのでした。

結局みんな受け止めてもらいたいんだなあ。

